

杉本苑子

穢土莊嚴

下

杉本苑子

穢土莊嚴

えどしようこん

下

穢土莊嚴^{えどしようこん} 上

昭和六十一年五月二十日 第一刷
昭和六十一年十一月十日 第六刷

定価 一二〇〇円

著 者 杉 本 苑 子

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三一二三

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次

第十四章 金 宝 丹 7

第十五章 疫神跳梁 25

第十六章 報 復 47

第十七章 広嗣、叛す 77

第十八章 都うつり 95

第十九章 毒 害 109

第二十章 帝王とは、何なのか

第二十一章 玄昉の首 151

第二十二章 燃灯会 177

第二十三章 死の埀堦 199

第二十四章 往く者、送る者 229

第二十五章 夕虹 238

装画

奥田元宋
「麻」

装幀

粟屋 充

題字

中田 功

穢土莊嚴

下

第十四章 金 宝 丹

一

五月一日——。都の空が日中というのに暗くなった。日蝕である。陰陽寮からは頭を通して、天文博士らの奉った表が、あらかじめ太政官に提出されてあった。曆算に照らして予知されていた現象だから、朝廷では特に天体の異変とは認めず、慣習に従って僧侶六百人を宮中に請じ、大般若經を誦誦させたにとどまつたが、市民の畏怖は強かった。太陽が欠け始め、少しずつ翳りだした日ざしに、まず敏感な反応を示したのは鳥や獣である。鴉、雀、鳩などがあわだしく舞い立ち、天空を群れ翔けて狂ったような啼き声をあげた。

地上ではそれにこたえて伏せ籠の鶏が時刻はずれなときをつくる。犬が吠え猫が走り、溝の鼠がとまどって水屋の中へ飛び込む異様に、

「お日さまを見ろ」
人間も騒ぎ出した。

「欠けてきている。日蝕だぞッ」

「おりもおり、何という不吉な……」

色を失ってだれもおののいたのは、疫病の拡がりに方途を失いかけていたやさきだからであった。

藤原広嗣が友人の三中を大伴家に見舞った三月末ごろ、最初の患者を出した平城京は、それから一月しかたない今、疫神のほしいままな支配下にすっかり潛伏してしまっていた。

三軒に一軒は患家だし、五人に一人は重症の患者だった。そして病人十人の内、八人までは苦しみぬいた末に命を落としていたのである。

治療の方法がわからない。いったんかかったらあとは運と体力に委せるしかなかった。人々が疫神の理不尽さ、容赦のなさ、身の毛をよだてたのは、身分や貧富、血の尊貴など、人間を選ばず上でのものとも確かな尺度と信じてきたものを、憚りもなく土足にかけて踏みこじつてのけた点だった。

病魔の毒牙の前には富者も貧者もなく、貴族も土民もなかった。普段だったら、まともには仰ぎ見ることすら遠慮せねばならぬ階層の男女までが、自分たちと同じ病苦にのた打ち、同じ道を同じ葬地に向かって、続々送られて行く

のを目にすると、庶民たちはかえって恐怖した。抑圧されつづけている日ごろからすれば、

「ざまを見よ」

と葬列に向かつて、悪態の一つ二ついてもおかしくないとところなのに、実際は逆だった。堅固な屋敷に住み滋養のある食事を摂り、重ね着にも護衛にも存分に守られているはずの貴顕たちまでが疫病にはほどこす術もなく敗退している。まして無力な自分らごとき、暴風にさらされた灯火にひとしい……。

「いつ、やられるか」

今日か、明日かと息をころして、炎暑のまつただ中、風通しのわるい家の奥に閉じこもり合っている有様なのだ。

高官連中の計報があいつぐなかで、だれの死にもまして人々を驚かせたのは、まず四月十七日に発表された藤原房前の急逝であった。

参議に民部卿を兼ねるこの、光明皇后の異母兄が、藤原四兄弟の中でもずばぬけて聖武帝の信任あつい重鎮であることを知らぬ者はいない。年もまだ、働さざかりの五十七だ。病臥と聞いて、親族や廷臣らがおっ取り刀で駆けつけ、典藥寮からは光明子の特旨として医師も出向いたのに、薬餌の効なく永眠してしまったのである。

朝廷では聖武帝が痛哭し、

「大臣の待遇に準じて葬儀をいとなむように……」

と言いやったが、妻の牟漏女王はじめ鳥養や永手、八束、清河、魚名ら遺児たちは、

「もったいない仰せです」

固く辞して受けなかった。

田植への最盛期であるにもかかわらず日照りつづきで代掻きもままならない。乏しい水の奪い合いから近郊の農民のあいだには鬭擾事件がひき起こされる始末だし、かろうじて水を確保しても苗の生育が思わしくなく、雨量の極端な少さからやがて立ち枯れの悲運にも見舞われた。

日蝕は、そんな騒動のさなかに現れた天変だった。だれもが天を指さして、

「凶兆にきまつている。旱魃に疫鬼……。この上どんな災難が降りかかってくる前じらせか」

慄えあがったのも無理はない。

五月十九日、聖武天皇は詔勅を発した。

疫、早、並、並行ハレテ田苗焦萎ス。是ニ由リテ山川ニ祈禱シ、神祇ヲ饗祭スレドモ未ダ効驗ヲ得ズ。今ニ至ルマデ猶苦シム。朕ガ不徳ヲ以テ実ニ茲災ヲ致セリ。思フニ寛仁ヲ布キテ以テ民患ヲ救ハントス……。

そのためには政事を正し冤罪を審かにし、身寄りのない孤老や寡婦にして疾に悩む者には賑給を加える、罪人も

大赦すると触れ出したけれども、日照りにしろ悪疫の流行にしろ、一向に終熄しうきくの気配は見えない。それどころか、官吏のあいだに罹患者がますます増えはじめ、役所がどこも空席だらけとなったため、やむをえず六月一日には、廃朝の宣言まで出さざるをえなくなった。日本の心臓部が止まってしまったのである。

平城京内だけではなかった。秋、七月に入るところには山城、近江、伊賀、若狭など大和周辺の諸国からも瘡瘡の跳梁を報ずる早馬が到来したし、東は美濃、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆までが、津浪に浸される早さで汚染地区に組み込まれていった。九州全域、山陽、山陰の惨害はいまさら言うまでもない。

——四条三坊の酒屋では、大伴子虫の伯父がひどい発熱に苦しんでいた。

「水を替えてこい」

言いつけられて井戸へ走るのは、もと長屋王家の男奴だった熊樫だ。王家の滅亡後そのまま酒屋に居ついてしまった彼は、もういっばし古株の一人で、酒の仕込み時には習いおぼえた腕をふるう。杜氏の下働きとして、重宝がられるまでになっていたのである。

替えても替えても水はすぐ、ぬるくなる。炎天下、渴れかける寸前にまで水位の落ち込んだ井戸は、それじたい、

ぬるま湯の溜りみたいなものだから病人の熱さましには効をなさない。枕辺に詰めきって、それでも子虫は懸命に手巾を絞る。伯父の額にあてがい、たちまち湯気を噴きそうになるのを、取っては絞り取っては絞って、昨日から一睡もしなかった。

伯母は三年前に物故していた。鰥夫で子無しの伯父が病んだとなれば、看病は子虫の役回りとなる。

夫婦仲がむつまじかっただけに、老妻に先立たれたあと伯父は気鬱のようになり、商売にも身が入らなくなった。淋しさをまぎらすためかこっそり賭けごとに出し、やがて熱中して子虫が気づいたときには身代みしろに大穴をあけていた。旦那旦那と持ちあげられて銀張りの鷹揚な遊び方をしているうちに、博徒らに鴨にされ、骨までしゃぶられたわけなのだろう。

酒造業はどうにか続いている。奉公人も熊樫をいれて男ばかり四人、まだ働いてはいるけれども、店も住居もどうやら抵当に取られてしまったらしい。

「堅気な伯父さんを、ガニ打ち仲間に曳きずりこんだ張本は貴様だろう」

きめつけられて、

「凶星です。勘弁してください」

熊樫は低頭した。

「気が滅入ってたまらない、酒を飲んでも大道芸など見て

も、少しも浮き立たぬとおっしゃるので、つい昔なじみの賭場へご案内しちまつたわけですが、これほどまでのめり込みなさうとは、まさか、ねえ」

「とんでもないやつだ。おかげでこの家はめっちゃめっちゃになっちまつたじゃないか」

「わっしもおぞ毛をふるって、途中で幾度となくお諫めはしたんです。でも、奴風情の意見になんざ耳を藉そうともなさらないのでねえ」

と嘆息してみせる。さすがにいささは悔いている顔つきだが、お人好しの主人を蕩らしこんで、よいように金を使わせ、自分も一緒に、じつは手慰みを楽しんだにちがいないと子虫は睨んでいた。根っからの奴隷上りなのだ。身に沁みついた奴婢根性——狡さや横着さが、一朝一夕に抜けるものでないことは同じような幾多の例が証明している。

「いいか、忘れるなよ」

よい機会なので、子虫は釘をさしてやった。

「たまたま長屋王家が凶変に遭ったさい、おれの供をして九州に行っていたために、帰京後も引きつづき、お前は当家に奉公できたんだ。さもなければ王家の消滅と同時に身柄を官没されて、諸官庁か官寺か、ともあれ公の奴溜りにぶちこまれ、死ぬまで苦役から逃がれられなかったんだぞ」

「わかってますさ」

「わかっていいるなら神妙に働けよ。この家でだって労働に変わりはないけれど、奴頭の怒声と鞭に追いつてられながら、へとへとになるまで、き使われるくらしとは、飯の量にしろ仕事の中身にしろ較べものにならないんだからな」

「恩に着てますよ子虫さん。あんたが黙っていてくれるので、おれがもと官奴だったことをだれも知っちゃいねえ。おかげで人並みに、町住みができるんですからね」

しかし子虫の側も、本来、返さなければならぬはずの公物を、どさくさまぎれに私有して口を拭っている弱みはある。おたがいさまなのだ。その辺を熊樞は百も承知だから、態度では恐れ入ってみせても、

(えげなよ、主人面して……)

心中、嘯いているかもしれないし、また、子虫にしたところで伯父の財産に、さして執着があるわけではなかった。「店を継いでくれば、わしら夫婦の死後なにかもお前に譲る」

と言われ、大宰府からもどったあとしばらくは、行き処もないまま商売を手伝いはしたものの、酒造りなどもともと性に合わないのである。

伝手をたよって、とうとう一昨年の春からまた、勤めに出了。長屋王家の資人だった旧歴は、今はまったく咎めの対象などにならず、むしろ兵衛府の武官を兼ねていたことや射技の腕が買われて兵庫寮に配属され、史生を振り出し

に、現在では少属にまで進んでいる。官位も、もとの大初位から加算されたおかげで下ッ端ながら従八位下に任ぜられていた。

彼にはしかも、妻がい、子までいる。恋女房は、張上福の娘の暗英であつた。的を射はずさぬ子虫の矢は、ついに暗英の心臓を射止めたのだらうか。炊事場で、いまでもコトコト何やら煮炊きの音がするが、その細腰に纏わりついて、「ねえ母さん、買ってよ練り飴……。表に飴売りが来てるんだよう」

鼻を鳴らしている少年は、子虫の実子ではない。暗英の連れ子なのだ。

「この子ぐるみ引き取ってくださるなら……」
それを条件にして嫁してきた暗英だったのである。

二

子の父の名など、子虫は知らないふりをしている。訊かない約束になっているからだが、推量はとくについていた。暗英は子供に、春雄という名をつけた。梅の花がほころびる春先に誕生したからだと言う。

「わたし、梅が好きなのよ。子虫さん覚えている？ 長屋王邸の表門の脇にも立派な梅の木があつたわねえ」

「毎年みごとな実をつけたな。お屋敷が解体され、薬師寺

に運ばれて塔になってしまったあとは……あの梅もどうなつたろう」

「この子の名も、梅の花の咲く季節に合せてつけてみたの」

言いわけじみた言葉が、かえって真実を語ってしまっている。手代夏雄の忘れ形見であるからこそ、『春雄』なのだ。

(それでもいい)

子虫は割り切っていた。

鈴鹿王の襲撃に失敗し、捕われて獄に繋がれながら、なぜか当の被害者である王家の口ききで断罪を免れ、出獄後、そのまま行方をくらましてしまった夏雄……。

(あいつの子なら、父親代りは、おれがつとめるのが最適なんだ)

そう思つて手塩にかけてきたせいかな春雄は子虫になつき、義理の仲であることすら気取っていない。

忍羽部綾児を斬殺する前夜、夏雄が菅原寺の仮寓で暗英と契つた事実は、おぼろげに子虫も察知している。張上福の目をかすめ、暗英の側が熱情のおもむくままに夏雄のふところへとび込んで行つたのだ。

(そしてみごもつた。たった一夜の交りなのに、夏雄の分身を宿したというのも、よくよく深い宿業というやつかもしれない)

染物の技術を身につけてゐる皓英は、

「子供と二人、自力で生きぬく覚悟です」

父にも子虫にも言い張ったが、この先、老いてゆく一方の上福をかかえ、女手で子を育てる苦勞を思うと、子虫は手をこまぬいてゐられなかった。

「突つかえ棒の役に立たせてくれ、な？ 皓英さん。夏雄の生死はわからない。待ちぼうけで一生を終るより、二人で赤ン坊を育てようじゃないか」

張上福にも説得され、ようやく皓英が夏雄への執着を断ち切るまでに、それでも一年余りかかった。出産につづく育児……。染物どころではなくなった毎日に、皓英自身、音をあげた節もある。

（初婚の甥に、子持ちの女とは……）

はじめ洩っていた伯父も、子虫の有頂天ぶりを目にしては苦情が言えなかった。

世帯は別に持った。勤めに近い町すじに借家を見つけて入ったのである。伯父の家なら間数はあった。でも子虫は、舅に仕えるような氣づまりを皓英にさせたくなかったし、春雄のことで何やかや近所の噂になる辛さからも、新妻を庇いたかったのである。

張上福の孤獨を懸念して、そちらへの同居も考えたけれど、

「こんな鼻のつかえそうな小家で、若い者にいちやつかれ

たら命が続かん。いくら枯木寒巖の老人とはいっても、切ればまだ、温い血は出るのだからな」

一言のもとに断られた。上福は上福で子虫の窮屈さを察して、わざと邪慳にはねつけたのだらう。

結婚すると決まると、皓英はきっぱり氣持の整理をつけたようだった。まめまめしく家事に氣をくばり、子虫のちよつとした冗談にも差って、うっすら耳たぶなど根らめる申し分ない妻になった。

春雄の可愛さにも子虫はわし掴みされてしまっている。生みの父に顔たちが酷似しているのが、時に子虫を考え込ませる因とはなった。皓英の懷胎を知らず、まして夢にも、春雄という我が子がこの世に存在するなどは知らぬ夏雄が、もし、不意に現れでもしたらどんな戸惑いを見せるだろう……。

（おれを父と信じて、しかも春雄が成人している姿を目にしたら……）

夏雄がどのような、複雑した思いを味わうかと想像するだけで、子虫の平静も乱される。

（いっそ、母親似であつてくれたらよかったのに……）

造化の神の意地の悪さに舌打ちしたくなるけれども、何事につけても生來、深刻には考えこめないたちの男ではあつた。

（ま、先案じていても仕方がない）

その時はその時と居直って、兵庫寮と借家の間を毎日往復しつづけていた。

春雄が六歳になり七歳になり、乳児期ほどに手がかからなくなると、皓英もともと好きな手技だけにまた染物の仕事を再開した。藤原一門の夫人たちははじめ晶屑してくれていた貴婦人連中のたつての奨めもあったためだが、おかげで子虫の安月給を上回る収入が入るようになり、家計もぐんと楽になった。

そんなやさき、疫病がはやり出したのだ。そして不幸にも、子虫のただ一人の肉親である酒屋の伯父までがその魔手に捉えられてしまったのである。

奉公人のほか、今はみとる者のない家庭であった。上司に休暇をもらって子虫は伯父の家に泊りこんだ。皓英も夫や奉公人の食事づくりに、一日のうち何時間かは通って来はじめた。子供を一人では置けないので春雄までつれてくるのを、

「いかんよ子虫、妻子はこの家に入りさせるな」

伯父はしきりに気づかかって高熱の合間合間に囁言のようにくり返す。感染を恐れているのだ。

「大丈夫ですよ。病間には足踏みさせませんし、それにまだ、伯父さんの熱は裳瘡とは決まっちゃいないんですから……」

「わしも夏風邪だと信じている。だって訝しいよ子虫、疫

病流行のきざしが見えると思う、わしは懇意な巫女にたのんで災難よけの禁厭をしてもらったし、靈験あらたかと評判の金宝丹もいちはやく服用した。疫神になどつけ入れられるはずはないのだ」

「なんですその、金宝丹というのは……」

「お前、知らないのか。ひと粒飲んでおくと裳瘡にかからぬという唐渡りの貴重薬だよ。高価なものだが命にはかえられぬと思ってね、向いの家の婆さんに頼んでいち早く手に入れておいたのさ。なんでも押すな押すな騒ぎで、容易には求められないとかいう話なのでね」

日蝕の日の恐慌までが重なって、巷では流言や迷信がはびこり放題はびこりはじめていた。向こう三年間、疫鬼と早魃はつづき、人種は絶えはてる、日蝕はその告示だと触れ廻る陰陽師がいるかと思うと、産み月の妊婦が日蝕を見たために、畸型児を生んでしまったのだ、疫神は大蒜の臭気を嫌う、戸口に蒜の束をさげておけば裳瘡の侵入は避けられるといったぐいの風説が飛びかい、人々を右往左往させた。

子虫の伯父も金宝丹とやらの効験を語っていられるうちはよかったのだが、熱はその晩からさらに高くなつて、もう四日もさがる気配がなく、今は昏睡状態をつづけている。こんな中でも官営の市場は西の市、東の市とも開いているし、飴屋をはじめ担ぎ売りの商人が路地路地を廻っては

来た。皓英は、でも、

「いけません、めったなものを口にして、もし病氣にかかりでもしたらどうするの」

春雄の駄々こねを叱りつけて、取り合おうとしない。

高熱に伴って激しい頭痛と腰痛が襲い、ほとんど何も食べていないのに嘔吐しはじめたのは、伯父の病状にもはやまぎれもなく、裳瘡に共通な徴候が現れたと見てよさそうだった。

三

重態に陥ったのは、病み伏して十二日目の夕刻である。

「伯父さまの様子が急変しました。いらしてください父さま、すぐに……」

皓英の、眉に火のつきそうな口上をたずさえて張上福の家へ飛んできたのは熊樫だ。竈の脇に突っ立ったまま木飯を掻き込んでいた上福は、

「おう、心得た」

箸を抛り出して薬入れの袋を掴みあげた。娘が大伴子虫の妻となつて以来、酒屋の伯父と上福との間にも、いわば姻戚つき合いのかかわりが生じたわけだし、それでなくても上福は医師だった。

しばしば見舞いに訪れ、投薬もしていたけれども、いま

彼は身体が十あっても足りないほど忙しい。西の市場に近い上福の住居の近辺は、都も場末の下町だけに棟つぎの小家が多く、その日ぐらしの細民がひしめいている。疫病の蔓延も、したがって枯野に火を放つ勢いでこのあたり一帯にいちじるしい。

「先生ッ、うちの婆さんが昨夜から熱を……」

「坊やの顔に発疹が出はじめました。たのみます、診に来てくださいまし」

ひっきりなしの訴えに、よる夜中だろうと明け方だろうと嫌な顔ひとつ見せず走り廻って応じる熱気は、さながら阿修羅のすさまじさだが、病人やその家族らの目には生身の薬師と映って当然だった。

「でも、ろくに寝もせず落ちついて食事もとらずに患家廻りなどしては、やがてはお父さまご自身が参ってしまわ。疫病は身体の疲れにつけ込むと申しますもの。人助けも、ほどほどになさるなければ……」

皓英が諫め、

「そうですとも。薬代すら満足に払えぬ貧乏人ばかり相手では、くたびれるだけ損ですぞ」

子虫が口を添えても、

「馬鹿野郎」

一喝するだけで上福は取り合わない。

「医者なんてものはな、こんな時のためにあるんだぞ。い